

# 資料：「昭和20年の中学生展」

兼清 順子

立命館大学国際平和ミュージアム学芸員

## 1 平和博物館の資料と聞き取り調査について

立命館大学国際平和ミュージアムは「戦争と平和に関する資料」を収集している。しかし、その内容を具体的に定義することは難しい。「戦争の実相を伝える資料」も、「平和の大切さを訴える活動の記録」も「平和への願いを込めて作った作品」も「戦争と平和に関する資料」である。嘘のようだが、「平和活動に携わった人が持っていた資料」であれば、キャバクラのPR用ライターも「平和に関する資料」になる。現実的には、その資料が戦争と平和に関して大切なことをどれだけ伝えられるか、が判断材料となるのだろう。だが、資料の意義は解釈に左右される。また、その時は見えないことがのちに判明することもあり、一時代の少数の人間の主観で決めることには危険もある。しかし、一時代の少数の人間にも「平和に関して大切なこと」を資料から引き出し、「戦争と平和に関する」資料にすることはできる。こうした作業の一つとして、資料に関する聞き取り調査を行うことは、急務である。特に、「戦争の実相を伝える資料」に関しては、関係者が高齢化し、資料の使用者や、制作者から直接情報を得ることは日々困難になりつつある。

2008年11月～12月に開催した特別展「昭和20年の中学生」展は、学徒労働動員の体験を中心に、10代の若者として第二次世界大戦を経験した方々の体験に焦点を当てた。限られた時間と人員による作業であったが、当時の体験について伺うと同時に、所蔵資料の調査をさせていただき、資料に関する情報の聞き取りを行った。古いアルバムなどを丹念に探していただいたが、当時は過酷な生活環境にあり、モノを残す余裕がなかったため、当時のものは、写真一枚残されていない方もあった（体験の意味と戦争の時代に関する資料を残すという点ではこのエピソードは大変示唆的である）。また、多くの体験を語っていただいたが、60年以上の年月の中で、転居などを繰り返し、やはり昔のものはすでにお持ちではない方もあった。しかし、この調査を通して、資料とその背景にある体験が強く結

びついて、相乗効果を生み出し、「モノ」が「戦争と平和について大切なこと」を伝える場面もあった。

ここに掲載する「昭和20年の中学生展」関連調査は、2008年7月から10月にかけて、この展覧会で取り扱うことを前提に行った聞き取り調査の一部である。ここに掲載する以外にも、多くの方にご協力をいただき、貴重なお話を賜ったが、紙面の関係上、これまでに他のメディアで紹介されたことのないものを中心に掲載する。ここに掲載する調査は、すべて、国際平和ミュージアムの兼清順子と小幡かほりの2名で行ったものである。

## 2 「昭和20年の中学生展」聞き取り調査

以下の記録は兼清・小幡が聞きとった内容の要点を可能な限り忠実にまとめたものであり、もとより聞き取り者の主観は一切排除している。

### (1) 大塚隆氏

#### 大塚隆氏の経歴について

京都市に在住し、昭和12年に立命館商業学校に入学、その後、専門学校、大学と進んだ。

当時の京都の学校は、大谷、龍谷、同志社、立命。大谷（東本願寺）と龍谷（西本願寺）は仏教、同志社はキリスト教、立命は皇国史観がベースの学校だった。国全体の皇国史観にうまく乗っていた。敗戦色が強くなると、立命館大学が潰されるかも……という思いがあったが、石原さん、末川さんがそれを（立命館が残ることを……）助けた。禁裏を守る学生隊として禁衛隊があった。天皇が御所に宿泊中、すぐ側の同志社から火の手があがり、立命館の学生隊が禁裏を守った。

#### 禁衛隊費について

禁衛隊費や、無給会費など、よくわからない費用を取られた。平和ミュージアムへの（大塚氏からの）寄贈資料の中に「領収書」があるが、禁衛隊費等理解のできない項目があった。府立二中の弟に比べて学費が高いので親に申し訳ないと思った。また、「1日1銭

貯金」があり、毎朝、各教室に集めに来た。その日の出席者からだけ徴収する。卒業時には返してくれたが、学校は金利を稼いでいたはず。玉谷何某という事務員が1時間目の授業前に集めに来ていた。一人一人から徴収し帳簿をつけるので時間もかかり、時間がもったいなと思った。玉谷は中川小十郎の世話になっているという噂もあった。

### 好きな科目、嫌いな科目について

担任は、1年は宮本先生、最後の学年は5年1組で西羽先生だった。嫌いだったのは商業科目。滑り止めで、2次試験で入れるから受験して、家が商売をやっていたから入学した。入学試験は、内申書、体力、綴り方。前年は内申書、体力、歴史だったらしいが、簡素化されたとのこと。弟(3歳年下)はテストもなく、お辞儀だけ、今で言う面接だけで合格した。試験は内申書、体力、面接だった。

好きだった科目は、国語、漢文、地理歴史、理科。専門学校では化学を専攻した。民法や商法の先生の教え方はつまらなかった。修身は人気のある先生が担当していた。松岡先生。定年後の採用の先生で、高齢だけどいい先生が多かった。(卒業アルバムで先生がかぶっているのは戦闘帽、着ているのは国民服)香山先生は桜木の研究で著名だった。白川静先生の甲骨文字の話が面白かった。若く情熱的で漢文の授業の他に喋っていた。田中十太郎先生は枕草子。先生の脱線が面白かった。卒業アルバムに載っている先生方は、軍事・禁衛隊について口にした先生はほとんどいない。雇われた軍人が軍事教育をしていた。

### 教練について

教練は、教練歩兵操典に基づいて行われていた。1歩85センチで歩く練習からはじめた。これは、メジャーがなくても距離がわかるように。初歩から始めて十剣術まで。5年間で後ろから見れば兵士に見えるほどに訓練した。(注：一般には1歩75センチと言われていた)

立命館は「私立の幼年学校」といわれるほど熱心に教練を行っていた。教練の時間は週に2回2時間程度、5年生は軍人のようだった。みんな同じ条件でやっているんで特につらいとは感じなかった。自分だけで精一杯だった。体力のない人はつらかったかも知れない。「校門は営門に通じる」と教育受けていた。修身の皇民教育は小学校から始まっている。へいたいススキの教科書。すきっ腹がつかった。修身教科書の最初の

ページは、カラーで「日の丸万歳」、弟の教科書はカラーで「天皇の行列」。

### 体力検定について

俵をかついでまわる、手榴弾投げ、懸垂があり、金、銀、銅のバッチがもらえる。5年生のとき銅のバッチをもらった。(体力章、1冊は弟のもの)俵は重かった。一番しんどかった。手榴弾は鉄の塊。擲弾筒(てきだんとう)の練習をした。擲弾筒に手榴弾を入れて引っ張ると、敵の方へ手榴弾が飛ぶ。自分一人対敵複数人の時は有効な武器だった。手榴弾を中に入れて発射する。中国軍のものは柄がついていて、こちらに着地したものを投げ返すつわものもいたと聞いた。戦力として効果あった。だが、沖縄では、何人もが輪になって肩をよせあって、一人が口で手榴弾のピンを抜き、何人も一緒に自決した。そういうことがあったということ強調したい。

体育の時間は、手旗信号、剣道、銃剣道、短剣だけで戦う練習。奥様は、なぎなたの訓練でわら人形をついた。(終戦時、大塚さんの奥様は国民学校5年生)

### 勤労奉仕について

勤労奉仕では、近くの農家のお手伝いに行った。けんずいというおやつ時間が楽しみだった。(大塚さんは専門学校時代に勤労動員、商業学校時代には奉仕のみ。大塚さんより年の下の子たちは、舞鶴の工廠へ)学校へは下駄で登校していた。烏丸今出川から、北大路まで歩いた。校庭でははだし。小豆島の砂がまいてあった。体の弱いものは交通機関を使うことが許された。かばんは竹製、ふちが革だった。こんなことは立命館だけだった。いやだったのは、秋に「勉強専一」の垂れ幕がかかること。中川の考えだったらしい。(禁衛隊も中川の考え)行楽シーズンなのに、勉強せいと言われる。

禁衛隊の旗は校旗だったのか、それが旗だった。学生服の胸に禁衛隊バッチを縫いつけた。校則でつけることが決まっていた。重かった。溝口秀治郎先生の家に禁衛隊の旗が何本かあったらしい。それが現在、立命館大学に寄贈されている。

配属将校が全校生徒2千人に志願書類を配り、海軍予科を受験しろ、しないものは理由を書けと言った。20人以上行くことになった。壮行会があった。(大塚さんは)長男だから行かないと書いた。同級生は何人

か行っている。学校教育の中に軍隊が入り込んでいた。学生の処分にさえ、配属将校は発言権があった。生徒は特に怖いと思わなかったけれど職員室の中での権力はあったと思う。連合演習では将校は馬に乗って颯爽としていた。

昭和20年は、凶作（低温・日照不足）の年だった。配給は10日遅れた。北海道は特に大変だった。専門学校（姫路ひろはた）生徒で、中国地方の製鉄会社で働いていた。（製鉄会社の寮に入る）理工系なので徴兵延長だったが、学問でなく動員。アメリカ資本の機械が入っているので空襲はないと言っていた。でも原料がなく、溶鉱炉は一つ停止していた。弟は川西航空へ学徒動員。原爆のニュースも噂で聞いて知っていた。

### 同人誌について

昭和16年から同人誌を手作りしていた。なまえは「つはもの」。自分が考えた名前。商業学校4年のとき、文学好きの同人が集まってつくった。全部はないが、ある分をいつか寄贈したいが、同人なので仲間の了承を得てから。

米英軍艦一覧図は、自分が取り寄せ購入し、教室の後ろに張った。大本営発表で敵艦を沈没させたとあるたびに、仲間が赤くバツするしをつけて、後何隻と言っていたが、何度も同じ軍艦が沈められる。大本営発表は嘘だと知った。

※2008年7月11日、京都市内の大塚氏のご自宅にて、兼清順子、小幡かほり聞き取り、兼清まとめ。

### (2) 牧原茂雄氏

- ・話を伺った方は「李孝馥（リコウフク）」日本名は「牧原茂雄」さん。祖父は牧原弘一さん。家の中では日本名で呼ばれていた。母は学校に行っていないので日本語を話さない。
- ・ドイツはきちんと事実を教えている。日本の歴史の教育ももっとしっかりしておくべきだった。
- ・大阪大空襲の日は卒業の1日前。フセ第三小学校卒業式前日に焼夷弾が落とされた。焼夷弾が落ちるのが見える。八尾飛行場のサーチライトではB29に届かない。
- ・上野区、港区焼け野原。
- ・グランドに死体を集めガソリンをかけ焼いた。
- ・大阪城（現在のビジネス街）は軍の工場があり、全部焼けた。
- ・泥沼に焼夷弾（不発弾）が落ちていて、引き抜いて売りに行ったことがある。

- ・父母と3人の子どもの5人家族。昭和16年韓国でツルマチ小学校に入る。韓国は植民地化が進む。
- ・昭和17年日本に来る。
- ・日本に来てみたら、仕事が倍・賃金が半分。朝鮮から日本へ来る時、神棚を焼いてきた。「和館」で農地を把握されていた。農地を売らないと生活できない状態になり、日本に来るよう募集がかかる。来て見たらひどいもの！（←植民地化するため）
- ・昭和6年1月15日生まれ（戸籍は2年遅れで昭和8年1月15日生まれで登録）。
- ・小学校5・6年生の時、軍事訓練をした（竹やり、バケツリレー）。訓練をしても、実際に起こるとみんな我先に逃げていた。
- ・給食があった（パン一つと味噌汁。おいしかった）。物のない時代だったので、いつもお腹が空いていた。特に好きな教科はなかった。
- ・学校は15・16時ぐらいまでであった。放課後はかくれんぼや探偵ごっこをして遊んでいた。日本人・朝鮮人混ざって区別無く。
- ・戦後になって区別・差別を感じた。
- ・吉田首相の時に外国人登録証を作り差別を感じた。朝鮮籍で作った。
- ・韓国人の中では、「豊臣秀吉」「伊藤博文」「吉田茂」が悪い人。
- ・疎開のために家具を車に入れて引いて平岡に行った。
- ・平岡の鉄線の軍需工場へ行った。これはお金のため。朝早くから夜遅くまで10時間くらい働いていた。針金に鍍金をつける仕事。勤労働員で来ている中学生くらいの子どももいた。
- ・8月15日終戦時、働くところがない、学校に行くことも考えていなかった。
- ・名古屋の工場へ父は行っていた。母は仕事がなく何もしていなかった。
- ・軍需工場では30歳くらいのおばちゃんがお風呂に入れてくれていた。かなりたくさんの子どもが働いていた。終戦8月15日、食堂に集まって玉音放送を聞いた。泣いている人（日本人）、マンセー（万歳）と言っている人（朝鮮人）がいた。子どもだったので放送で何を言っているのかよく分からなかった。社長が出てきて工場を止めると言った。
- ・電車に乗って（無料）よく買出しに行った。米・葉タバコなどを運んだ。葉タバコは手で巻いて子どもたちが売っていた。
- ・水石嶮の工場を鶴橋で2～3年行っていたが、近鉄

線拡大のため立ち退きになった。

- ・12月8日、当時はよく雪が降っていた。学校では半ズボンでとても寒かった。軍人が出てきて朝礼をする。すごく寒かったのを覚えている。
- ・戦中使っていたものは、戦後宿替えを何度もして今では無い。捨ててしまった。
- ・朝鮮から日本へ来る時に持ってきたもの。祖父が使っていたノート。直譜（家系図）。

※2008年8月30日、大阪府内の喫茶店にて、兼清順子、小幡かほり聞き取り、小幡まとめ。

### (3) 小野恵美子氏

#### 小野氏の経歴

京都市に在住し、昭和16年同志社女子部に入学、父は京都大学の滝川事件で連座して辞職したが、その後すぐに亡くなり、当時は母と兄と弟と双子の妹と祖父のもとで暮らしていた。兄は予科練に行っていた。開戦まで両親をパパ、ママと呼んでいた。祖父から、交番から言われるから日本語にするように言われた。1年生で入学した当時は、クラスメイトもワンピースで通学していた。3年生の頃から、モンペが増えた。

#### 勤労働員について

昭和19年、4年生の夏に三菱電機伊丹製作所に勤労働員で働きに行くことになった。その時は、一緒に動員が決まった生徒たちとの楽しい寮生活を想像していたから、はやる気持ちがあった。ところが、寮は兵舎のようで、ノミやしらみだらけで汚かった。12畳に12人が入った。1月に1回家に帰ることができた。帰るとそのまま戻ってこない人もいて、1年を通してのは12人のうち6人くらい。動員先に戻らなくて済むように（医師の）診断書を貰う人もいたが、大変まじめな家庭だったので、そういうことはできなかった。虫歯になり、歯の治療のために家に戻れるかと思ったことがあったが、歯を抜いて、1日で終わってしまっただけで良かった。仕方ないと思って我慢した。

#### 寮での生活について

寮の食事当番では、当番の人は自分のところにおかずが一番多いのを置いていた。靴は配給品で、わら草履を買ってはいた。手紙は先生が検閲していた。（後で聞いたが）家を懐かしがることのないように。毎晩日誌を書いた。ノートがないので、2冊目は父の残したスケッチブックの残りに書いた。特攻隊員の妹がいて、その人の兄が突撃した時はみんなで黙とうした。

動員に行く時や、動員から帰るときに友達にサイン帳を書いてもらった。（サイン帳の）かわいいシールなど、同志社だから許されたのかもしれない。

#### 工場での作業について

方向指示器等を作っていた。せんばん（ねじを切る作業）だった。測った最初はきちっと溝ができるけれど、だんだん甘くなる。100くらい作るとダメになる。

はじめは作業は日中だけだった。やがて昼夜2交代になった。上番の人は、朝4時ごろから食事当番、6時に出勤。下番は、午後2時から10時くらいまで。3時から4時頃まで「突撃時間」があった。ラッパが鳴って、その時はトイレも行ってはいけない。はじめは優雅だった。学生は警戒警報で寮に帰ってよかった。でも、いつも（警戒警報が）なるから、それが空襲警報へ変更。そのうちずっと作業をして、敵機が上空へ来たら防空壕へ避難することになった。工員も疎開、せんばんも疎開して、工場はもの不足だった。実際は（工場は）空っぽなのに、みんなが国のためにしているということが大切だった。

#### 空襲について（小野氏は空襲体験者ではない）

すごい轟音、何十機も上を飛んでいくことがあった。人が死んでいるのを見ることはなかったけれど、爆撃の跡を見ることはあった。十三（じゅうそう）駅を通った時、（空襲の直後で）何も無い。まだくすぶる匂いがした。

#### 進学試験について

同志社の上を受けた。英文に行きたかったけれど、家政を受けた。筆記試験があって、試験を受けに帰った。受験のために1月か2月に京都で写真をうつした。暖房がないからセーラーの下にセーター。肩につく髪はしばらなければいけない。変な髪で不満な顔をしている。胸に着けているのは学徒動員のマーク。（小野氏所蔵の当時のアルバムの写真について）3月に発表があった。卒業のときに帰ってくると思ったけれど、20年の4月以降も残された。6月に動員解除のデマが飛んだ。上の学校へ入った人だけ引き上げて、夏休みの頃に入学式があった。女専の建物に行く。

#### 8月15日について

女専に入って、1ヶ月くらいで「大切な放送がある」と言われて、みんな教室に集められた。放送はムニャムニャ言っていた。午後は授業はなし、知らせがある

まで自宅待機と言われた。路面電車に乗って帰る途中、瓦がきらきらしていた。女の人ばかり乗っていて小声で話していた。（同じ道を通っているのに）朝は戦争、帰りは戦争が済んだ。これはどういうこと、と思った。何でと思った。何で早く終わらなかったと思って、すぐに戦争はない、自由なんだと思うと震えるほどうれしかった。家では、母が電灯の暗幕を外した。庭に植えたサツマイモまで電灯の灯が届いた。喜んでいたら、空襲警報のサイレンが鳴った。

※2008年10月17日、京都市内小野氏のご自宅にて、兼清順子、小幡かほり聞き取り、兼清まとめ。